

平成27年度 第2回豊橋市総合教育会議議事録要旨

平成27年7月29日 開催

豊橋市教育委員会

<b>第 2 回 総合教育会議</b>	
<b>日時</b>	平成 2 7 年 7 月 2 9 日 (水) 午後 3 時～5 時 3 0 分
<b>場所</b>	市役所西館 8 階第 3 委員会室
<b>構成員</b>	佐原 光一 市長、木下 治 教育委員長、 朝倉 由美子 教育委員長職務代理者、芳賀 亜希子 教育委員、 高橋 豊彦 教育委員、加藤 正俊 教育長
<b>事務局</b>	加藤 喜康 教育部長、金子 尚央 教育部次長、 村田 敬三 教育政策課長、山西 正泰 学校教育課長、 中田 浩次 教育政策課主幹、守田 雅一 学校教育課主幹 ほか全 12 名
<b>その他</b>	傍聴人 4 人

#### 議 事 日 程

市長あいさつ

#### 協議事項

- 1 豊橋市教育振興基本計画後期計画の策定について
- 2 個別案件について  
「学力・体力の向上について」
- 3 今後の協議事項について
- 4 その他

#### 連絡事項

- ・次回開催日程

## 市長あいさつ

先日の第1回の総合教育会議で色々話をする事ができた。学力・体力、基本的なことについてしっかり議論したいこと、そして本日も協議事項に上がっている豊橋市教育振興基本計画後期計画の策定について話した。その後、学力・体力の問題については教育委員会で先進県の福井市の様子を視察し、議論をしてまとめた。その報告もしながら第2回の総合教育会議を進めたい。

それでは次第に従って進めます。協議事項1「豊橋市教育振興基本計画後期計画の策定について」ですが、現在、これについては教育委員会において、教育振興基本計画後期計画を作成しており、8月中に前期の総括を市議会の福祉教育委員会に提示していく。この計画は、教育の大綱にも関わってくるので、この場で協議したい。事務局から説明してください。

## 協議事項

### 1 豊橋市教育振興基本計画後期計画の策定について

#### ■教育政策課長 協議事項第1号について説明（別添資料）

（市長）

まず、前期の総括のところで質問・意見があればお願いします。

（高橋委員）

9ページの「(2)時代に対応した教育の推進」についてです。ICT教育の推進についてたまたま牛川小学校のケースに関わり、嵩山小学校にも見学に行った。

その推進についての私の個人的な感想だが、その下の「(3)教職員の力量向上」の課題として掲げられている先生方の多忙化もあり、慎重に進めて欲しい。ICT教育の推進は成果としては出ている。嵩山小の例でもそうだが、その場その場では良いように思える。しかし、この授業のための準備をこの先生が、これだけやったということが透けて見え、そのボリュームを考えると、準備そのものをシステム化する必要がある。ICT教育が低学年から必要なのかという疑問もあり、まだまだ課題もある。機器が入って良かったと単純に進めて欲しくない。

理科では映像化することで非常に効果がある。興味を引くという点でのメリットもある。しかし、デバイスはデバイスなので、その一方でネット環境に関わるリスクもある。良い面だけを捉えるのではなく総合的な検討をして欲しい。

来週、小中高連携の情報モラル研究会もあるので、良い面と悪い面を一緒に出して、豊橋らしいものにして欲しい。

(市長)

現場からの声で聞いていることはあるか。

(事務局)

高橋委員が言われたように、嵩山小もだいぶ慣れたが、準備段階の手間がかかり、かなり大変ではある。最初は教師自身がどう扱うかからのスタートだったので難しかったと聞いている。

(市長)

慣れてきて、色々な学校で同じ教材を使えるようになるわけだから、その時は早くなる。

(高橋委員)

パッケージソフトを売る会社にもものすごく左右される可能性が出てくる。

(市長)

牛川小と嵩山小では違う学習で使っているが、導入したきっかけは、いずれデジタル教科書の時代になるであろうということ。それに対処する時に、色々な都市の成功例、失敗例があるが、自分たちの経験を持たないと評価ができない。牛川、嵩山小の経験をもとに、理科や社会科では使いやすいことが分かり、また、どこでつまづいているか、それぞれの子どもつまづきの確認もできることが分かった。しかし、こういうことは、時間ばかりかかって効果が薄い、というようなことも蓄積していく必要がある。

(高橋委員)

導入ありきではなく、使い方を一つ一つのツールとしてうまく付き合っていくことが求められている。

(市長)

明治以来、日本の学校の授業の仕方は一緒であることが、気になっている。諸外国を見ると変わっていることがいっぱいあり、板書授業という形をとる国も少なくなっている。日本でも色々なことをやるが、板書型の授業に戻っている。ハイテクに対応する人材を育てる中で、これで良いのかを見ていかななくてはいけない。小学校でも二段重ねの黒板だっていい。ホワイト・ボードでも良いと思い、そのように言ったら、ホワイト・ボードでは、光って後ろの子は見えないとのことであった。色々試行錯誤をして改良を重ねて欲しい。

(高橋委員)

先日、袋井市で三遠南信教育サミットがあった。全体的な印象として、教育と言いながら、町づくり、人づくりに関わらざるを得ないということが伝わってきた。少子化というより、人口減少という問題にそれぞれが直面している。今回は、比較的小さい市、町の発表が多かったので、余計その印象が強い。教育委員会は、学校教育の場だけでなく、もう少し俯瞰的に見なくてはいけない時代になっているという印象を受けた。

(市長)

そういう意味では、この教育振興基本計画の基本政策で見ると、学校教育は7つある基本政策の中の7分の1しか占めていない。これを見て、逆に7分の1で良いのかという話

をした。多分、これまでこういう場で話されてきた教育委員会との話題の大半は学校教育の話であった。生涯教育やスポーツ振興、芸術振興の話はほとんど出なかったが、ここにはこんなに沢山書いてある。このアンバランスは気になった。もう少し学校教育をしっかり見ていきたい。

この教育振興基本計画を初めて見た時に言ったのは、めざす人物像の「心豊かで、夢と志を持ち、ともに生きる人」について、言っていることは分からないではないが、これは学校教育のめざす人物像なのか、生涯、死ぬまでにこういう人間になりましょうとめざす人物像なのかがよく分からない。また、「ともに生きる人」は確かに大事なことだが、一人でも生きられる人も作らなくてはいけない。頼ってばかりで生きる人を作っていいか。めざす人物像は、どの時点での評価なのか。小中学校を卒業した時点なら分かるが。めざす人物像というよりも、こんな人になりたい、こういう人になるために色々やっていきましょう、という書き方なのか。

めざす教育も、何の教育なのか分からなかった。生涯教育の観点からなのか、学校教育の視点からなのかが分からなかった、という話をした。

(高橋委員)

一人の人間を見据えた時に、幼小中高のロードマップ的なものがないとイメージできない。

(市長)

小学校では、まずここまでを目標にしよう。中学を出たら、高校を出たらここまでにしようとか、社会人の若い頃、そして社会人を終える頃、もう一方で老人になる入口のところの目標とか、人生の節目、節目での目標なら分かるが、一括りにして語られると、何なのかが分からなくなる。

(高橋委員)

我々が事業主の立場として、事業評価をしなくてはいけない時に、ロードマップを示して照合していかないと事業評価しにくいということと同様である。

(市長)

学校経営評価でAランクが70%とか、愛知県産の食材使用率を高めようとか、市高、家政の就職率を高めようとか、指標となるのはそういうことだけではないのではないかと。

(高橋委員)

市高でいうと、進学・就職・その他があるが、その他の割合が結構多い。その他はどこへ行ったかが不明瞭で曖昧。また、地元企業、会議所も含めてマッチングはどうなのかというと、そこも曖昧。

(朝倉委員)

学校教育の指標は、どういう観点からこの三つに絞ったのか。

(事務局)

タイトルと指標がアンマッチしているとの指摘だが、5年前に指標を出す時に、教育委

員会のそれぞれの課が持っている指標を計画の段階から出したと思われる。次回は内容に見合った指標を考えて行きたい。

(朝倉委員)

基準値は、何が基本になっているのか。

(事務局)

21年度の実績が基準となっている。

(市長)

総合計画を作る時も目標とする指標を何にするかについて、結構悩ましくて揉めて最後の最後まで決まらない時がある。具体的な数字で出すのになかなか良いデータがない時がある。感覚的な表現では何とでもできる。

また、農業の統計を豊橋市は今取っていない。豊橋市のように農業が盛んな地域が出したくてもデータがないので使えないということもある。

(高橋委員)

愛知県は、野菜の消費量が一番少ない県と出ているが、逆にこの辺では野菜はもらうもので買うものではない、と考えているから少ないという結果になったのではないか。指標としてふさわしいものとふさわしくないものがあるので、地域の特性も踏まえてどういう指標を使うかをもう一度精査しなくてはいけない。

いじめや不登校、発達障害に関わる問題について指標として触れていない。今までのように認知件数が少ない方が良いという感覚でいくべきなのか、正直に言う環境を作るかによって違ってくる。

(市長)

前期計画の時点では、そういう問題はまだ重要視されていなかったもので、あまり書いてない。後期を考える時は、そういった問題にも対応していきたい。現状として、市立の特別支援の学校を作り、「ほいっふ」で発達障害について徹底的に対応しようとしている。そのことの後押しをするためにも、活動している人の目標をはっきりさせる良いタイミングと感じている。

(芳賀委員)

特別な支援や発達障害について、8ページの「個に応じた教育」の中では触れられているが、特に取り上げてというところまではいけてない。

(市長)

色々な背景や個性を持った子がいる。発達障害なども個性として捉えて触れていった方が良いのか。家庭の問題でも、ことによったらDVの問題も含めて、別途、個別な課題として取り出して扱うようなことを考えてはどうか。

(教育長)

後期は、機構改革に連動して基本政策2の「子ども・若者の健全育成」の方は、こども未来部との関係もあるので「基本政策の成果と課題」のところで推移を含めて書き込んで

いくことになる。

(高橋委員)

5年の歳月が経つとずいぶん社会背景も変わってくる。その間には、大きな事故や事件もあった。

(芳賀委員)

そういった時代背景の中で、市立の高校の存在は大きい。市高（豊橋高校）に行くことができたことでその先の歩む道をひらくことができた子がたくさんいる。実際、卒業生の声を聞くと思うものがある。市立だからこそという視点で、今後もさらに力を入れていくと良い。

(市長)

私も市高の存在はとても大きいと評価している。あそこの卒業式は楽しいし、環境をもっと良くしたい。

(木下委員)

現在手狭な状態なので、アクセスの良いところに移転できないか考えたい。

(朝倉委員)

卒業式に行かせていただき、卒業生はすごく生き生きとしている。ある一面からすると、多少問題を抱えた子が行く学校という色付けをされがちだが、そういう子とそうでない子が、お互い垣根を乗り越えて交流できていることも良い。

(高橋委員)

子ども同士はしっかりと、お互いを認めあっているのに、意外と周りが理解していないという面がある。

(朝倉委員)

そういう中で、この就職率の数字が見えていると、採用する側が人物本位でなく、通っている人たちの色から入ってしまうということはないのか。

(高橋委員)

事業者として、採用で合う合わないは選択せざるを得ない。事業者として関わるのと人として関わるのとでは、どうしても違う部分が出てくる。この3月に初めて市高の卒業式に出て、子どもたちのそぶりを見て、こんないい子ならマッチングできれば問い合わせがあると思うが、意外と接点がない。実際に子どもと会うと先入観はなくなる。

(市長)

これからの後期計画の中に、私たちが意識していることをどう描きこんでいくのかというところを議論したいと思う。後段の中間見直しの方針、骨子に踏み込んで意見をいただきたい。中間見直し案、取組みの基本方針の中で、拾えるものがあったら入れていきたい。ぜひこんな目線、視点で見たらというご意見をいただきたい。

新しく始めることになった特別支援学校での教育や、その子たちが社会に出ることを支える仕組みは、どこで扱っているのか。

(事務局)

「市立の強みを生かした教育の推進」の中で、市高、家政、くすのき特別支援学校を生かし、力を入れていくことを大きな柱として出していきたい。

(市長)

農業を支える若者を支えたり、人材を育成したりすることについても個人的には書きたい。

(高橋委員)

東三河セーフティネットで農園を使って就労の支援をやっている。単純作業という何だが、同じことを繰り返し正確にやることに長けている人がいる。そういう人たちが、社会で自立できる仕掛けを豊橋の特徴として出すことも悪くない。

(市長)

そういう子の中には、花とか植物を育てるのが好きで、誰よりも丁寧で熱心な子がいるという期待も持っている。そういうところを見抜いて、しっかり引き出してやりたいというのが、市立で特別支援学校を持つとした基本的な考えの一つ。

後期計画の中間見直しで、この5年間で変わってきたことについて、それをどうしていくかの方向性を示したり、目標を持ったりするのは大事なこと。

(木下委員)

いじめのことは、言葉として入れたい。

(市長)

岩手の問題もあり、取り上げた方がいい。

(高橋委員)

いじめの認知件数は比較的多いという印象を持っている。学校現場では、すばやく一緒になって組織として対応しようという風土が醸成されている。

(市長)

家庭内暴力や、DVについても比較的きっちり出てきている。

(高橋委員)

分からないから不安という人がいるので、こうだから安心してください、勝手に不安がらないで下さい、というメッセージ性も含めて出せると良い。

(市長)

いじめでも、もしかすると、本人はいじめだと思っていないという大変だが、いじめた側はそう思っていないということがある。同じ環境で育った者にとってはごく普通と感じる言葉のやり取りにしても、異なる環境で育った者には異なる意味で伝わることもある。私の家内などは東京から来て、ここの人にとっては普通に話をしているだけなのに、豊橋ではいつもケンカしているみたいだと。

(木下委員)

叱られている、怒られている、と同じように受け方の違い。個人によって、育った環境

によって違う。

(市長)

本人が気付かないものを気付かせる。本人が納得すれば、場合によっては、家庭も変わってくれる。その子が悪くならないうちに止める。事件になると、悪い子になってしまう。

今日も、子どもを産むという話がテレビで放送されていて、子どもを産むことは痛い、苦しい、子育ても大変で夜も眠れないとネガティブな部分を強調されており、子どもを産むことが嫌になってしまう。そうではなく、子どもと一緒に成長するのは楽しいことだよ、眠くても子どもの笑顔を見ると忘れられる。正しく理解してもらうために、色々な情報を提供して、学校の現場でも分かってもらおうと、いじめなどその手前で認知できたり、本人が自覚していないことを自覚することで本人が変わったりすることもある。これは、難しいことだが、チャレンジしたい。一步踏み込まないと、事件が表に出てから初めて知ったということになりかねない。

(朝倉委員)

そういうことは、これまでも方向性として書かれているところもあるが、具体的にどういうことをするのが必要。目標だけを掲げても、実践的な施策が具体的にないと、これをやれと言っても、実際に何をどうやるのかが分からない。やってみたが効果が出なかったならば、どういう風にやったのか、見直しをして違う方法で取り組んだのか、というようなどころを知りたい。

分析を見ると、色々な要因が考えられるとあるが、例えば半年経っても目標値に行かない場合、何が問題なのか、方法を変えたのか、などが書かれている数値からは見えてこない。目標はたくさん掲げられているので、それに対して具体的に何をするという、もっと細かいプロセスや一つ一つできたかという検証がないと、結果だけでは分からない。

(市長)

これは計画の中で、どこまでを書き込むのかという課題である。目標を掲げ、そのためにどういう活動をしよう、という所まで書くのか。

(事務局)

取組みの基本方針の下に考え方を書きながら、そのために行う手法を書き、その中から重点施策を示します。

(朝倉委員)

同じように掲げられた取組みの内容でも、手法によって成功する、しない、この地域には合う、合わないということがあり、一括りにはいかない。そういうことは分けて対応しているのか。

(事務局)

実態としては、毎年指標を各課で出し、決算から進捗管理をするために教育政策課でヒアリングをし、伸びていないところは何が悪いか、こういうことをやればいいのかなどの検討を重ねている。

(市長)

その過程というのは、7・8月とか、10・11月とか、教育委員のメンバーには報告をされているのか。

(事務局)

教育委員に、A3の横の資料で去年から報告している。

(朝倉委員)

総合的な人づくりは必要で、成長期の子どもたちをどうするかという課題に対しては、市高もそうだが、目下のところは、学力、体力に集中して、その後には幅を持たせるために、文化や芸術の部分を育てていけたらと思う。ただし、成績の議論だけが先に行ってしまうてはまずい。

(市長)

教育振興基本計画の内容は網羅的。今後のことを含めて、この会議でどこまで細かくやるのかは大きな論点である。私たちの目標の中心は、市高も抱えているが、中学校を卒業するまでにどのような学力・体力その他の社会生活力などの色々な力をどうやって育むかが本題、中心課題である。併せて、社会情勢の変化やその後の生き方についても議論ができればと考えていた。

ただ、今回教育振興基本計画の策定が出てきたので範囲が広がっている。例えば、スポーツであれば、総合スポーツの在り方で触れていき、芸術であれば合唱、ブラスバンド、演劇で触れていく、と思っていた。

(木下委員)

基本政策の7つの内、実際に議論するのは1の「学校教育の推進」、2の「子ども・若者の健全育成」が大事で、3の「生涯学習の推進」以降は大人も入ってくるので教育委員会の中の管轄ではあるが、実際に議論を深めていきたいのは1、2に関わること。

(市長)

我々は、基本政策の1、2を中心に進め、それに関わることで基本政策3から7について触れていくことになる。

(事務局)

基本政策の1「学校教育の推進」の事業が圧倒的に多い。

(市長)

それでは、今回は、もう少し書き込まれた内容によって議論を交わしたいと思うので、次の会までにしっかりと検討をいただきたい。

### 3 個別案件について

次に協議事項2の「個別案件について」に移ります。テーマは、前回に引き続き、「学力・体力の向上について」です。事務局から説明してください。

■学校教育課長 「学力・体力の向上について」を説明

■生涯学習課長 「土曜日の教育活動モデル事業について」を説明（別添資料）

（市長）

福井市で学んだことをベースに、今年度中に準備をして来年度からやりたい。

豊橋市の現状と一番違うのは、確実に家庭で宿題をやってくること。福井市では家族と一緒に宿題を見てやるという習慣がある。両親がまだ帰っていないと、祖父・祖母が見る。豊橋市では福井市に比べて3世代同居が少なく、働く環境も違うが、豊橋でできることを学校教育の中で考えていただいた。そして、資料にあるように土曜日を利用して、子どもたちがより実社会に近い経験をしたり、自分が学んだことを成果として生かせる成功体験の場所を作りたい。これは別の意味で、高齢者がコミュニティ・デビューをする機会となる。地域との関わりを持ち、社会性を維持し、認知症、老化防止を含めた生涯学習の一つとなることが期待できる。

（高橋委員）

豊橋市と福井市では、世帯構成が違うのか。もし、同居率が下がっているれば、福井市でも苦労しているという仮説が成り立つ。3世代同居だからうまくいっているのか。

（市長）

3世代同居だけでなく、宿題はやるものだという習慣がついていることが大きい。

（高橋委員）

ノーメディアデーとか、比較的徹底されていて結果に出ているのか、精査の必要がある。

（事務局）

福井市の小学校の校長の話では、出した宿題はほとんどやってくる。家の人が付いてやらせていると聞いた。世代同居がどうかは分からない。

（市長）

多少、3世代同居率は福井市の方が高い。豊橋市もそんなには悪くない。

鳥取にいた時、圧倒的にテレビのチャンネル数が少なかった。子どもはテレビをあまり見ず、近所の家に集まり、その家で親も一緒になって遊んでくれる。それがごく自然にできている。福井県の鯖江市でもスマホの普及率は高いという情報がある。家庭の中で学びに対してきちんと向き合うことが伝統的にできている。

（芳賀委員）

小学校の部活動がないとのことだが、クラブチームはどれくらいか。放課後の過ごし方はどうなのか。家庭で学習ができること、それが大きな違いなのか。

（高橋委員）

福井市では、親世代なども宿題を見てもらったという経験があるのか、もう少し長い時代的スパンの中で根付いているのではないか。

(市長)

児童クラブでは、見守るだけではなく、宿題を一緒に見てやったり、歌いたい子は歌ったり、楽器を演奏したい子はしてもいいのではないかと。時間の過ごし方をもっと上手に考えることで、子どもが帰宅してから親に、「こんなことやってきたよ。でもここが分からなかったから教えて」という雰囲気醸成するやり方によって変わっていくという方法もある。

(朝倉委員)

児童クラブでやったから良いでなく、親は子どもから様子を聞いて確認をして下さい、となれば、保護者が帰ってから子どもの宿題を見るので、少し変わってくる。親の学び直しで認知症の防止、家庭の教育力の向上が期待できる。地域によっては、向上が難しい地域もあるだろうし、行政でのサポートも必要。

(高橋委員)

このことの責任はこの人と限定されると、やっていないことを責められやすくなる。するとそれが負担となる場合があるので、うまく責任を分散する仕組みも必要。

また、ボランティアで通学路に立つ地域の方が、子どもから挨拶が返らなくて寂しいので、何とかならないかという話がある。私は、通勤でいつも学校の前を通るので、いつの時代は誰がいたか全部知っている。子どもに挨拶をするのが校長の時期もあるし、若手の強面の方の時期の方がきっちりしていた時もあるし、挨拶は大事だと思う。現場では急に変わったなというが、色々な要素がある。

(市長)

中学校では挨拶をしてくれる子が減って、高校ではしなくなってしまう子が多い。

(高橋委員)

挨拶とともに姿勢も気になる。体力については、腰骨が立っておらず、走り方を知らない子どもが多いが、練習をすればすぐに速くなる場合もある。

(市長)

野球やソフトボールをやったことのない子が先生になっている場合もあり、先生がボールの投げ方を教えられない。

(木下委員)

最近では、親子でキャッチボールをやる光景を見たことがない。

(高橋委員)

福井市は、小学生の部活動をやってないのに体力も高いが、この因果関係はどうだろう。

(市長)

部活動では、野球しか、サッカーしか、水泳しかできない子を作っている。

(高橋委員)

走ることで、人工的な平らなところでしか走っていないと、でこぼこな所で走ることに耐えられない。

(朝倉委員)

福井県は、体操でも進んでいるところですよ。

(市長)

多少言い訳をさせてもらおうと、体力テストを豊橋市は5月、福井市は6月に実施しているという影響もあるそうだ。順位付けは抜きにしても、もう少し基礎体力は欲しい。

(高橋委員)

姿勢が保てないとなると、一定の業務を遂行するのに支障がある。

(市長)

立食パーティーで、最近では若い子が先に座っている。

(高橋委員)

福井市は、PDCAがしっかりしているとのことだが、具体的にどういう回し方、誰がどの段階で何をチェックするのか。

(事務局)

福井市では、テスト結果の分析をして、学校の教務主任から簡単なシートで担任レベルまで伝わる。豊橋市は分析はするが、分析結果は学校まで行っても担任レベルまで伝わっていない。

(市長)

福井市は、一人ひとりの教員が事前に問題分析までやっており、それを結果と照らし合わせるができる。

(事務局)

豊橋市では、分析までやっていない教員もいて、教務主任の言うことが理解できないことがある。この流れを良くするために、豊橋市では、福井市では入れていない専門家による分析をして、全ての担任まで届くようにしたい。

(高橋委員)

モデルケースでやるのか、全校に入れるのか。

(事務局)

人数のこともあるので、ブロックごとに研修をしたい。

(市長)

成果の具合によって、そのシステムをしっかり生かすためにどうするかが次の課題として出てくる。

(高橋委員)

教科担任制の話が少しずつスタートしている。これは原則的に、定年を終えた方がやるというイメージか。

(事務局)

そうではなく、基本的に大きな学校では各教科の専門性を持った教員が、持ち時間を変える形で対応する。小さな学校では市の予算の加配の非常勤で対応する。

(高橋委員)

教員の多忙化の話もあり、教員を終えた方を活用するなどの方法で、ちょっと相談に乗るとかが考えられるのではないか。

(朝倉委員)

アドバイザー的に回っている方がいますね。

(事務局)

現在、退職された教員やまだ正規採用になっていない方を講師登録したバンクを作っている。ただし、理科がもともとと少なくて十分には確保できていない。

(高橋委員)

小中高連携教育推進協議会で、小学校の先生が理科の実験で苦勞をしているという話があった。

(芳賀委員)

理科が専門でない小学校の教員という話ですね。理科は大学でどの学部・分野に行くかによって違ってしまふ。

(教育長)

定年は60歳のままだが、再任用制度で、実質的な定年は65歳まで延びてきている。60歳の方が5年間再任用で働くとなると、定数の枠の中ではめるしかない。正規教員の定員の1が再任用2人で1人分になる。しかし、再任用者の中には、フルタイムで働きたいという希望もある。学校現場の職員構成をこれからの人事計画とセットで考えると、教科限定だが、図工、理科といった教科担任制を生かした再任用としてやってもらわないと制度設計ができない。

今は、ある程度の規模の学校では、人事配置の中で、教科担任制を学校経営の方針に基づいて配置していくので、人事配置や交換授業という学校の運営上の工夫で教科担任制を実現できる。ただ小規模校では、その部分を補うために市単独の予算要求をする必要があり、今年試行的に2人配置をしている。どの程度まで拡大できるのかが一つの課題。そして、必要な人数の講師を確保できるかの問題もある。

(市長)

再任用という仕組みが中途半端。一般職の退職者では、やりたいと言えば受けなくてはならない。その分、定数を食う。さらに、無責任にやめてしまうというケースがあることも問題である。一般職では、給料がかなり少なくなってしまうため、業務と給料とのバランスがネックとなっているため、中途半端な制度は辞めてほしい。

(高橋委員)

同一賃金、同一労働をイメージすると、そういう感情になるのだろう。

(市長)

次に、小中一貫教育の中で、教科担任制と併せてカリキュラムの問題に踏み込むという話で、皆さんにとって中1ギャップは何でしたか。

(教育長)

昔は不登校や、学校からリタイアするというような負の現象が、目に見える形ではなかった。確かに内容が難しくなったり、部活動が盛んになったり、ハンディの段差はあったが、そういった負の現象まではなかった。

(朝倉委員)

子どもから上に上がった感じがして、新鮮だった。

(高橋委員)

中学校は、自転車通学区域であったため、自転車に乗れるというのが嬉しかった。

(教育長)

学びのつながりを考えると、小中9年間を見据えたカリキュラムの中で、同じ方向を向いてやっていくことは大事なこと。今、小中一貫教育を試行している前芝小中学校のように、保育園、小・中学校が隣接しており、合同運動会を長年やってきた風土が大切である。前芝小中学校では、グラウンド・体育館も一緒に使う。校門も1つの前芝学校となっている。

今後は、組織、運営面でも校長が1人、小学校、中学校はそれぞれの教頭が統括する。今までの連携を超える、豊橋市で独特の歴史と立地を生かした小中一貫教育を考えたい。前芝以外の学校は施設が分離している。

(市長)

鷹丘小、東陵中のように、1小、1中はあるが、校舎が離れている。

(教育長)

学びのつながりという観点から見ると、小中で文化は違うが、小学校の高学年で専門の免許を持った先生が教えるのと学級担任が授業するのとでは、授業の質が違ってくという側面がある。顕著な差が出てくる教科については、行政として手を入れていこうと考えている。段差が高い分は付加価値でもあり、本来の目的は学びのつながりの中で、豊かな授業を提供するということ。

(木下委員)

小学校で中学校の空気を吸うことも大切である。

(市長)

土曜日の教育活動はいかがですか。人材の確保はできるか。

(高橋委員)

この教科が少ないというようなことがあれば、長期計画で採用まで考えなくてはいけない。小学校で英語が教科化されそうだが、ALTは教員免許を持っているのか。

(教育長)

ALTは、基本的に教員免許を持っていないため単独での授業はできず、担任の先生のサポーターである。今度、小学校の英語が教科となると、免許の問題もある。文科省も方向性は出すが、具体的な制度設計での人の手当て、財源は自治体任せになっている部分もある。

(市長)

それは現場で現実の問題となっており、少人数学級をやっている地域で、先生の授業時間だけが増えて、先生の定数は財源の問題で増やせず、先生が回らなくなってしまったという例がある。小人数指導をやる限りは、市が加配をできるというバックグラウンドがないと実質的には回らなくなる。

(芳賀委員)

一方で、教員を育てている大学においては、特に人文系は大変な状況になってきており、国の施策がこれでいいのかなと感じている。

(教育長)

国の高大接続の施策でいうと、現在中1の生徒が高2になった時、高校に学力テストが導入されることとなった。知識理解だけでなく、自分の考えを記述式で書くような形の学力テストを実施しようとしている。すると大学入試が変わってくるため、小中学校でも問題解決的な力が求められ、その力を強化していかななくては対応できない。

(市長)

合否判定側も力をつける必要がある。市役所の採用試験は、ペーパー試験がないカテゴリもあるため、面接官の腕にかかっている。採用は面接勝負になっており、3回チャレンジで集団面接もやる。私は、来たときからどんな態度、どんな仕草、どんな行動をとるか様子を見るよう言っている。

ある企業では、必ず喫茶店など外で会う機会を設ける。面接官より高いものを平気で頼む、自然に片づけるかなどを見ており、社会人としての適性や家庭のしつけを見る。

(教育長)

土曜日教育活動の取組みは、教育委員会は全力でやる必要がある。

(芳賀委員)

平成28年度の事業イメージ図があり、講師バンクとある。地域の大人、学生とあるのは、将来的に全小学校区へ広げていくために、小学校区単位の地域の人ということか。

(教育長)

基本的に目指しているのは、地域ぐるみの教育システムの構築。今の時代の中で、地域の子どもを地域の皆で育てていこうという風土を再構築しようとする仕掛け。その仕掛けの一つが、地域教育ボランティア制度。行政で地域リーダーを育てて、それを地域に帰す循環型のものを作った。今年開館した、生涯学習施設のミナクルにおいて中学校単位でやって、4小学校に広げる。次の段階として、他の中学校区に広げる。ここは、生涯学習課にとって非常に大きな取組みとなる。

(高橋委員)

大企業をリタイアした人で、意外とやることなく困っている人がいるが、そういう人材をリタイア前につかまえる働きかけが必要。在職中に会社から、これからは地域に貢献す

る必要もあると言ってもらうことで地域とも関わりを築き、リタイア後の活動へとつなぐことができる。

(市長)

今回の話し合いをベースに予算要求まで持っていきたい。次回には、予算要求の形で整理したものを出せると思う。色々出た意見で、アンテナに引っかかったものは取り入れ、予算要求の説明にも使わせていただく。

### 3 協議事項3「今後の協議事項について」

(市長)

今回は、予算要求前の時期となる。私としては、学校からどういうことが要望で上がってきているのかを知り、大きなテーマについては示して議論していきたい。高根小学校の問題は出て来るだろう。また、学校関係を中心にICTの問題、東三河全体でやる校務支援システムの説明をして、皆に応援をして欲しい。

(教育長)

8月に校長会や組合、PTAからの要望が出る。また、学校訪問で出た現場からの要望で、喫緊のものがあればこれも議論の対象としたい。

(市長)

あわせて、教育委員の方がこれから学校を見る機会があり、これまでのここでの議論を踏まえて、来年、ここ2、3年でこういうことをやっていこうなど気付くことがあれば、話を出して欲しい。例えば学校のトイレをきれいにするなど、ここで発言してくれば良い。タイミング的に予算に関わることはやっていきたい。

(教育長)

今回は、教育委員側から市長に、このことについて協議の場に乗って下さいということも出したい。

(市長)

その時、私はどの立場で聞けばいいのか微妙。でも、ここでやって、改めて予算要望という形で聞くのも変な話。

(教育長)

大きな骨子になるようなことの意見調整・協議を行いたい。

(市長)

ソフト面の話では、小1ギャップ解消のための加配を考えたり、発達障害のこと、英語ができる豊橋っ子的ための予算・制度設計を考えたり、テーマはいっぱいある。子どもが病気をしないようにするということもある。

学校に行けずに長期入院している生徒のために、サイエンス・クリエイトでソフトバンクが出したペッパー君を買って、豊橋技術科学大学の生徒とペッパー用のアプリを共同開発しようとしている。ロボットが代わりに授業に出席して、そこから送られる映像を見て、

病院から授業に参加できるようにすることなどを考えている。次に、そのような形での出席も学校に単位として認めてもらえればと考えている。

(教育長)

院内学級でなく、自分がいたクラスの授業に参加できるわけだ。

(市長)

サイエンス・クリエイトでも、豊橋技術科学大学の学生や研究者がソフトウェア開発をして、エンジニアを育てようとする仕組み作りが進んでいる。

(教育長)

今、国は、学校へ来ることができない子がフリースクールへ通っている場合に、教育委員会の責任で個別計画をしっかりと作って認可されれば、出席として認めようという方向で動いている。

(市長)

このソフトウェアは、全国に売れるかもしれない。成功すれば、サイエンス・クリエイトとしても成功体験として大きな効果が期待できる。

また、学校によって歯へのフッ素塗布をやっていない学校もあり、どうするか。全校でやっている学校とそうでないところの差がある。

(教育長)

歯科医師会としては広げたいということで、校長会で話をして少しずつ増えている。しかし、校長が変わると辞めてしまうこともある。まだ、一部の保護者にはフッ素への抵抗感がある。

(木下委員)

やったから効果があったという結果が出れば変わる。

(市長)

他県では明らかに虫歯が減ったと出ている。親が心配する、親がやるなという子はやらなければいい。みんな一律に同じことをやる必要はなく、歯を削るからと水だけで磨く子もいる。それでいいが、学校単位としてはやるようにして欲しい。

#### 4 今後の協議事項について

##### 連絡事項

- ・ 次回開催日程

平成27年10月15日(木) 午後3時から市役所西館7階第1会議室